

インターネット空間と現実世界との関係 —インターネットへの政治学的期待—

法学部 3 年 常盤成紀

目次

- 一、はじめに
- 二、一般的期待とその背景
- 三、反期待的現状
- 四、現状の原因の検討
- 五、期待対象の転回
- 六、結論
- 七、おわりに

一、はじめに

○本論のテーマ

本論は、1990年代より爆発的に普及した「パソコン」や「携帯電話（以下、ケータイ¹）」といった新しいメディア（以下本論に於いてこれらをまとめてニューメディアと呼称することがある）によって利用が手軽になったインターネットの持つコミュニケーション機能が、理論的にどのような政治的役割を担うと期待出来るのか、また、市民²の政治参加、社会参加にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とする。

○議論の前提

第一に、ニューメディアの持つ機能の定義を確認する。本論は、これの持つすべての機能に着目するのではなく、その中で、パソコンに於いては、いわゆる「SNS（Social Networking Service の略、mixi や Facebook、My Space に代表される、インターネット上で交流空間を提供するシステム）」や「掲示板」、「ブログ」、Twitter といったコミュニケーション機能及び一般のメール機能を対象とし、ケータイに於いてはケータイにおけるパソコン的機能（勿論その機能の限定は上に倣う）を対象として、議論を進める。

第二に、本論におけるアクターは、現実の世界に於いて少なくとも一人以上の他者との適度な交流関係を持つ者、一つ以上の親密圏³を構成している者を想定している。従って、完全に孤立する個人は対象としていない。

○本論の構成

本論は、はじめに、二に於いて、ニューメディアに対して、現在一般的に抱かれている「サイバー空間における討議の発達」という期待と、その期待が抱かれるようになった背景を論じる。次に三に於いて、その期待が、現実において実現していないことを、また四に於いてはその原因を論じる。そして五に於いては、自説の展開も兼ねて、一般に抱かれる期待が、サイバー空間における市民の政治的活動⁴の発展に向けられていることに限界があることを論じる。そして期待の対象を、サイバー空間における市民の政治的活動から、現実世界における市民の政治的活動へと転回し、インターネットの使用が、現実社会に於ける市民間の親密圏形成、連帯の強化に貢献し、またそれにより「討議」による政治ではなく「共感」に基づく政治が可能になるという点で、政治学的な期待が持てることを論じる。そして最後に、六に於いて、結論を論じる。

¹ 携帯電話を「ケータイ」と呼称することについては、携帯電話の持つ機能が、移動可能の通話機器という次元から、モバイル化された「インターネット端末」という次元にまで到達しており、現在の携帯電話への認識が、主にその機能を以てなされており、電話とは別種のもという認識がなされていることに由来する。詳しくは[下田 2010 p17-]などを参照。

² 本論の言うところの「市民」とは、政治学的に何ら含まれた意味を持たないことを加筆しておきたい。

³ 親密圏の定義は以下とする。即ち、「具体的な他者の生への配慮／関心を媒体とするある程度持続的な関係性」[齋藤 2008 p196]とする。

⁴ 本論の言うところの「政治的活動」とは、一般に言う政策提言や選挙活動以外にも、広く社会一般や日常生活についてなされる市民間の議論なども含む、広義的なものである。

なお、脚注に適宜挙げている参考文献、引用文献などの表記の凡例は、以下に従っている。即ち、[著者（共著者・原著者・編者含む）名 出版年 章頁など]としており、出版年に関しては、版、刷共に利用したものを附している。編著書の中の章を引用の場合、章の担当者の名前も共に附している。また、本論の最後に、正式な名称を列記している。

二、一般的期待とその背景

○背景としての社会

■社会的共同の消滅

第二次大戦後の世界の動きとして、1960年代は、民主化と参政権の拡大、自己実現の達成を求め、市民がデモやストライキなどの活動を展開した時期であった。日本に於いては、安保闘争(1960)や、東京大学安田講堂での全共闘運動を中心とする、文化的なものも含む全国的な学生運動(1968-70)がおこり、ヨーロッパに於いても五月革命(1968)がおこった。この世界的な動きに対して、市民の管理行政機構への民主主義的抵抗という観点から議論したのが、エルネスト・ラクラウとシャンタル・ムフであったが、ここで彼らが重要とした価値は、「管理行政機構が課す画一的な枠組みの拘束から」の「自由」であり、公共空間の創出をこの抵抗の運動に認めるとして、従来、管理行政機構が占有していた公共の概念は解体された、とした⁵。

しかし、1970年代に、おもに経済学分野でネオリベリズムが台頭すると、国家の市場への介入それ自体が「自由」の妨げになるとされるようになった。これは、前出のラクラウ＝ムフの言う「政治的自由」ではなく、「経済的自由」を追求するものでしかなく、反対に政治的自由が縮減され、公共空間は解体する。この潮流を受けて、篠原雅武は、前者の非効率的な国家機構の解体を「第一の解体」、後者のネオリベリズムによる民主主義的公共空間の解体を「第二の解体」と表現する⁶。

この「第二の解体」の結果、経済活動の社会的地位が、政治活動のそれを上回り、市民は意識的に政治との乖離を起こし、関心を失うようになる。同時に、村上泰亮が1970年代末に提起した「新中間大衆」若しくは同様の概念の「生活保守主義」者という、私生活中心、経済活動中心の、政治的態度が曖昧な市民が誕生する⁷。

同時に、「第二の解体」により、社会は急速にポストモダン化する。ジークムント・バウマンの言うように、ポストモダン（リキッドモダン）社会に於いては、経済活動の効率化が至上命題とされるため、市民の身分や、雇用、消費の流行その他全ての事実的なことについて、何一つ確定して不動なものはなく、全ての事実は「流動的」⁸となる。その

⁵ 篠原 2007 p27-28

⁶ Ibid. p28-29

⁷ 河田（武重）2009 p97

⁸ 分かりやすい例を示すならば、あるときに流行しているものについて、消費者としての満足を得るために一時的に当該商品を購入しても、また次の流行が来るため、欲求は永久に変わらない。雇用も身分も、雇用側に裁量の全権があり、雇用側が経済活動の効率化の

ような社会に於いて、個人は、自己同定（アイデンティティを持つこと）は、他人を参考にしつつも「それぞれ異なった条件のもとでおこなわなければならないために、それは協力と団結を誘発するような統一的状況よりも、分裂と過酷な競争という状況を作り出す」⁹。終身雇用などの伝統が否定され、未来が予測不能になると、生活の方法は個人が独りで見つけなければならなくなる。加えて、ゲオルグ・ジンメルは、産業の発展と共に都市化が進み、刺激の多い大都市の中で生きていく条件として他者との緩衝帯を持つ必要があり、結果、個人は他者に無関心になると述べた¹⁰。

以上の議論から分かるように、公共的な政治空間は、ネオリベリズムの言説によって「自由」の擁護の下に解体され、また同時に、経済活動や消費活動の発達、都市化を通じて行動の単位が個人になり、結果的に、いわゆる社会的共同が消滅してきている。こういったことから、市民間の政治的活動が縮減ないし消滅することが危惧される。

○サイバー空間における討議の発達、という期待

■サイバー空間という「場」の出現

前述のような、公共空間と市民の政治参加への危惧が高まると、それを解決するものとして、インターネット上で行われる議論の発達に、期待をするようになる。これは、「掲示板」「ブログ」「SNS」といった交流空間を、一種のアゴラと捉え、そこにおいて、ハーバーマスが『公共性の構造転換』¹¹において言うような討議デモクラシーの成熟を期待するものである。この代表的な論者が吉田純であるが、彼はハーバーマスの公共圏の概念を応用、批判的に継承しつつ、また、インターネット環境が整備されれば即座に「民主主義」が達成されるかのような技術決定論に陥らないよう注意しながら、インターネット上における討議の成立の可能性を論じている¹²。

■「距離」の消滅

他方、インターネットの持つ技術的な特性がこれを助けられると思われることも多い。中でも人間の「移動」の必要性が縮減されたことが挙げられるが、これは例えば、自宅に居ながら会議が出来る、などというようなことを指し、この結果、従来は「場」に集まらなければ出来なかった議論への参加が、格段に容易になったと言える。またこれを強めたのがモバイルケータイの登場であり、固定パソコンよりも、インターネット端末を身体的位置と一致させることが出来るため、これによりほぼ物理的束縛が無くなった¹³と言

みを重視するならば、それは不安定となる。これについては、詳しくは[Bauman 2009 第2章及び第4章]などを参照。

⁹ Bauman 2009 p118

¹⁰ 篠原 2007 p45

¹¹ Habermas 2008

¹² 吉田 2000 第4章及び第5章

¹³ このことを吉見俊哉は「脱場所化」といい、同様にパソコンも固定からノート型に変わっていったことを指摘している[吉見 2009 p211-]が、手軽さの面でケータイの方が、貢献度が高いことは言うまでもない。またモバイル化については[岡田・松田(富田) 2008 第3章]にも言及がある。

える。

■双方向メディア（インタラクティブ・メディア）としての機能

トマス・フリードマンが指摘したように、インターネットの発達は、情報のソースの権威をフラットにし、端末を持つ誰もが、受信者であると同時に送信者にもなり得る状況をもたらした¹⁴。つまり従来は、新聞やテレビといった既存のメディアのみが情報の発信者となり、市民はそれを受けるだけにとどまっていたが、インターネットが発達したことにより、市民が自身の持つサイトやしかるべきシステムを通じて、マイクロ単位の情報、共通善では解消されない個別利益に関する情報を発信することが出来るようになった。そしてどの情報もほぼ均等に扱われるようになる。この変化の前後二つのフェーズに対して、ソフト開発者ロバート・オブライエンはそれぞれ、前者を「集中化した彼ら」、後者を「分散化したわれわれ」と定義している¹⁵が、これは非常に示唆的である。

他方、情報の送信でなく受信の面に於いても、期待がかけられる。それは前出の「誰もが送信者となり得る」ことと関連するが、ある事件の当事者や目撃者本人が、当該事件に関してリアルタイムに発信した情報を、我々は得ることが出来る。それはほぼ1対1の情報のやり取りであるので、従来のような「卸し（＝既存メディア・記者クラブ）を介した」情報収集とは違って、それがダイレクトである分、情報の歪曲可能性¹⁶は大きく減る。

■二の結び

以上のような技術的進歩は、議論をするうえでの前提としての情報を豊かなものに行っているとと言える。また、政治的見解の発信の機会がフラット化されていることも、討議成熟への期待に繋げてよい。次章からは、討議への期待に対する現状の考察に入る。

三、反期待的現状

○討議成立の困難

■ネット右翼と議論の先鋭化

インターネットの「2ちゃんねる」に始まる「掲示板」や、個人のブログなどで政治的議論がなされるとき、その多くは、極端に右傾化した議論となる。「嫌韓」「嫌華」また反対に「嫌日」も見られるが、大抵が罵詈雑言の応酬となる。この一見ナショナリズム的な現象に対して、とりわけ日本の傾向を香山リカは「ぶちナショナリズム」と呼称し、また高原基彰は「趣味化したナショナリズム」と呼称している¹⁷。また、韓国や中国などの「反日」については、国内の社会問題への不安の「敵探し」が、国内ではなく国外に擬似

¹⁴ Freedman 2006

¹⁵ 佐々木 2008 p141,142

¹⁶ 情報の歪曲可能性については、「噂」という観点から論じた[竹内（広井）1988]が興味深い。情報の伝播方法として、介在する人間が増えると、情報が歪曲されやすいとしている。

¹⁷ 高原 2006 第2章

的に転移されていると論じている¹⁸。いずれにせよ、ファナティック且つショービニステイックな言論は、民族自決か共同体への愛着に由来する本来的なナショナリズムとは異なり、時に非論理的な、先鋭化した議論となるため、結果として、理性的な論者は、「場」から退出（exit）し、正常な議論は成立し難くなる。

■ルサンチマン的使用

前述のように、ネオリベラル・ポストモダン社会の経済構造は、市場原理に基づく優勝劣敗の法則と成果主義で成り立っており、雇用身分の不安定化を導くと共に、社会に閉塞感をもたらしている。同時に、日本に於いては1973年の「福祉元年」より進められた福祉政策が、人口構成の変化と、グローバル化による法人税収入の低下によって、その機能は低下してきている¹⁹。社会保障制度を含めたシステムが、市民に「生の見通し」を与えることが出来ず、非正規雇用の拡大と、富の過度な集中が進めば、ヘーゲルは、「貧富の分極化 一富と貧困それぞれにおける「過剰」 — という観点のみならず、社会にとって破壊的な情念」²⁰が産出、堆積するとして、それは「自然状態の残滓をなおひきずっている」²¹という。このような社会では、大衆は「内心の叛逆」を抱き、「道徳的鬱憤」は、強者ではなく弱者を標的とする回路になだれこむ²²。丸山眞男の言葉を借りるなら、いわゆる「抑圧の移譲」的現象がおこるのである。いわゆるまじめに働いている人たちによる「ニート批判・バッシング」（勿論彼らはポストモダンの犠牲者である）は、このようなことを背景にしている。このルサンチマン的言説は、ネット上の議論で更に深化し、醸成される。

■三の結び

以上の議論から、インターネットの発達により当初期待されていた討議が、実際には完全には成立しておらず、不確かながら成立していると言えるところか、反対に、社会的連帯を危うくする、その道具として利用されている、というアイロニカルな事実がある。次章より、その原因について、検討を加える。

四、現状の原因の検討

○能動的行動の必要性

■情報獲得と活用の困難

ハーバート・サイモンは『経営行動：経営組織における意思決定過程の研究』²³において、限定合理性という概念を示したが、これは現実世界で、人間は行動を起こす際に、

¹⁸ Ibid. p234

¹⁹ ウルリッヒ・ベックは、企業が生産基盤を税金の安い途上国に置く一方、それにより富を得た富裕層が依然先進国において福祉サービスを要求するため、国家財政が破綻する、としている[Beck 2005]。

²⁰ 齋藤 2008 p161

²¹ Ibid. p162

²² Ibid. p162

²³ Simon 2009

存在する多くの情報全てを選択肢として検討することはなく、可能の範囲に検討を終えることを言うものである。しかしインターネット上には、現実世界で得るよりのはるかに多くの情報量がある²⁴ため、それを整理して知識として議論に使う、という期待は、非現実的であると考えられる。

■反応のタイムラグ

実際にインターネット上で議論をした場合におこる代表的な齟齬として「期待の時間（さらに言えばタイミング）に反応が返ってこない」ことが挙げられる。この原因のうち、簡単なものには、端末のスペックが低いため、反映が遅れる、というものである。しかし技術以外の面に於いても原因があり、それは「相手が画面に向かう」様子と関連する。

一般のウェブ会議などは、時間が決められてその間画面に向かい議論をするということが多く、「掲示板」などに於いての議論の場合、送信者の意図するタイミングに反応が返ってくる確証が薄い。画面を見ていない、気に入らなくなれば（飽きたら）席を外して、気が向いたらまたページを開く、といったことが容易に起こり得る²⁵。結果、実際、前述の通り物理的束縛を克服してなされているはずのインターネット議論に於いて、「反応を待って画面に向かい続ける」（それが仮に長時間でなくとも、返答のタイミングが分からなければ、心理的負担は変わらない）ことによる更なる束縛が生じることになる。

○「画面の向こうの相手方」

■議論の相手が見えない

さらに、よく散見する言説として、「対話、議論をする相手の顔が見えない」ということが言われる。これはなにも本当に「顔」を見たいということのみを言うものではなく、我々が、相手方の身分（社会的階層）、性格、趣味その他ひととなり知らずに、当該人と対話、議論が出来ないことを言うものである。宮台真司によれば、「おまえの階級はいつたい何だ、おまえはいつたいどこの集団に所属しているんだ、といった文脈がはっきりしないと、発現された言葉や発信された情報の意味を解釈できない」²⁶のであって、共通のプラットフォームがないと議論の趣旨やレベルをフレーミングすることが出来ず、議論は成立しない。東浩紀はこの宮台の意見をコミュニタリアニズム的と付言する²⁷が、つまり、枠組みとしての議論コミュニティが形成されないことを指す。しかしながらインターネット上に於いては、このいわゆる「共通部分」が想像の域を出ないため、成立が困難となるのである。

■新「想像の共同体」

²⁴ 佐々木俊尚は、アメリカ、カリフォルニアのバークレー校の2003年の研究をもとに、インターネット上にある一人当たりの情報量は、書籍5000冊分に相当すると指摘している [佐々木 2008 p15-16]。

²⁵ 気軽に集まり議論をする、その気軽さの代償ともいえよう。

²⁶ 宮台・神保 2006 p48

²⁷ Ibid. p48-

ハンナ・アーレントは、「政治空間としての「公共領域」は、「他者と行動をともにする際に、その都度その行動のあいだけ生起する空間」²⁸であるとして、それを刹那的なものと定義した。そして、「現れの空間」は、「祭り²⁹の後」には何もなかったかのように霧散を運命づけられている」³⁰とした。この「現れの空間」とは、「人間がその意見と行為にもとづいて他者から判断されるという関係の成り立」³¹っている政治空間を表す。そしてアーレントは、その霧散を救済するのが、記憶の共同体としてのポリスであるとしている³²。しかし、ネット上での共同体は、いわばベネディクト・アンダーソンの用いた概念である「想像の共同体」に等しく（勿論実際のそれより想像の程度は高い）、その上、インターネット共同体における紐帯は、共通の記憶ではなく、せいぜい親近感でしかないだろう³³。「現れの空間」としての「公的」次元は、私と異なる他者と経験を共有することで開かれるリアリティ」³⁴を意味しているが、インターネット上に於いては、実現が難しいと思われる。

■ヴァルネラブルなネット上の集団

前述のように、アーレントは集団が刹那的であるということを既に指摘している。また、アンリ・ルフェーブルは、空間は「身体活動が作り出す行為と出来ごとに満たされた動的な状態」³⁵であるとした。これらいわゆる先行研究によって明らかなのは、集団の「成立」が不確実であるという点である。しかし、インターネット上で問題となるのは、「成立の脆弱性」ではなく、「集団自体の脆弱性」である。現実社会に於いては、集合して霧散する過程（若しくは霧散しなく永続する過程）は一定であり、条件成立と共に集合すれば、人間は、「祭り」が続く限り霧散しない。これに対して、インターネット上では、まずある集団が集合から霧散までの過程をたどるか、それ自体が危ぶまれていると言える。

■過激化のメカニズム

相手が見えないことによる弊害をもう一つ挙げるならば、画面上でのやり取りでは、発言者本人ではなく、表示される文字に、全責任が集中する、ということである。これにより発言者は内容に対して責めを負わなくなり、文字通り「人目を気にしない」発言をするようになる。また、相手の情報がないということ为例えると、ロールズ正義論上の「無知のヴェール」を反対に被るようなものであり、結果、「自分より弱い立場」でひ

²⁸ 石田 2009 p15

²⁹ 「祭り」とは、以下のように説明、定義される。即ち、政治的かつ非日常的な意味を含み、「既存の社会的諸関係の自明性が覆され・再編される」こととされる[Ibid. p16]。

³⁰ Ibid. p149

³¹ 齋藤 2008 p71

³² 石田 2009 p150

³³ 勿論、mixiを始めとするSNSならば、この弊害は取り除けるであろうが、ここではあらゆる人間との政治と討議が問われている。

³⁴ Ibid. p102

³⁵ 篠原 2007 p97-98

とまとめにくられる者たち（正規社員から見たニートなど）に対して強く出ることが出来る。結果、かれらに概括的な攻撃としての誹謗中傷を浴びせることが起きる。

■四の結び

以上の議論から分かるように、インターネット上での討議の発達には、現状では期待が持てるわけではない。それでは、インターネットはこの世界に於いて政治的役割を果たし得ないのか。本論では、ここで期待の対象を転回させ、別の形に於いて、インターネットが政治的期待を担いうることを述べたい。次章より、その論考に入る。

五、期待対象の転回

○「討議の場」への期待を捨てる

■討議成立の条件が整わない

これまで論じてきたように、インターネット上では、正常な討議や議論を成立させる条件を整えることが難しい。実際には、意見交換のタイミングや、議論の前提の構築（相手は専門用語が通じる人か素人か、興味がある人かない人かによって話す内容は変わる）など、様々なフェーズに於いてそろえないといけない条件があり、それが正常な議論の成立を困難にしていると言える。言うならば、物理的制約を攻略した議論の実施は「いささかアクロバティックに過ぎる」ものと思われる。

■ニューメディアの台頭と共に忘れられた「現実世界における交流」の再評価

これまでは主に、「インターネット上」への期待を議論してきた。しかし、視点を一度現実世界に移したい、いや、戻したいと思う。インターネットを利用してインターネット上で政治的行為を発達させることに期待するのではなく、インターネットを利用して「現実世界」で政治的行為を発達させることに期待を向けることが出来る、としよう。これが本論の要旨である。以降具体的に論じるが、今後本論におけるメインの政治空間は、あくまで現実世界であり、インターネット及びインターネット上の空間を、現実世界に於ける諸活動に貢献する道具として描く。

○現実世界における「親密圏の補強」としての役割への期待

■親密な他者とのかかわり

mixi の日記やブログなど、公開若しくは限定公開で様々なことを書く、という行為は、「見られること」が前提であり、言わば「自己の展示」としての性格を持つ。さらに言えば、そこで展示する自己は、「どう見られたいか」と関連する。この限りに於いては、Twitter のつぶやきも同様であると言える。そこで最も表現されるのは、「自分の理解してほしい面」である。川浦康至らが行った Web 日記に関する調査によれば、日記を継続するモチベーションとなるのは、書くことで自分の気持ちや考えが整理できるという「対自己効用」、他者との出会いや関わり合いができるという「対関係効用」、他人に自分のことが理解されているという「被理解満足」の 3 つであり、そのうちの「対自己効用」も、コメント

など、読み手からのフィードバックに支えられたものであることが明らかとなった³⁶。

また、特に mixi などは、私的な交流空間である。一時期は出会い系などが騒がれた³⁷が、大抵は、「マイミク」として、知っている人間が（「マイミク申請」により）集まって構成した交流グループとなっている。その圏域拡大方法も、大抵は「友達の友達」という場合が多く、かなりの場合、ユーザは、知らない人間がマイミクとなることを好まない。また、mixi ユーザが他人のページを訪問した際に残る「足あと」を辿って知らない人に申請をすることが出来るが、本人にとって知らない人の場合は大抵が拒否される。このようにして、親密なものだけで交際された空間が出来上がり、その中での交流が行われる。

■「時間外交流」

これまでの議論から、インターネットは「距離」を克服したことがわかる。この「距離の克服」（また、距離がある際はそれを移動する、その移動時間という意味で「時間の克服」）により、人間のコミュニケーションに於いては、実際に会うことが必須の条件ではなくなった。しかし、一またこれ以降述べるのが本論の核となるのだが—それは、人間同士が会わなくてもよくなった、会う必要がなくなったことを言うものではなく、むしろ、この「距離の克服」は、「次に会う時までの関係の強化」に貢献するようになったのである。

普段我々は、現実世界で誰かと交流するとき、大抵は「ではまた明日」という時を迎える。インターネットの発達以前、なされた会話は必ず持ちこしになる。しかし、別れた後、インターネット上（若しくはメール、電話でもよいが）で会話の続きをする、もしくは新たな会話をすると、次に会った時の話題は、豊富なものとなっている。この別れた後の交流のことを、本論では「時間外交流」と呼ぶこととする。この「時間外交流」が現実の親密圏の紐帯をより堅固なものとし、親密圏を補強、強化すると考えられる³⁸。

■親密圏の存在意義

あらかじめ断わっておくならば、親密圏は「傷のなめ合い集団」などという否定的な集まりではない。斎藤純一が述べているように、「私たちは、常に自立的な存在者として生きているわけでわな」く、「私たちの生は身体を通じて互いに曝され、互いに含みあっているのであり、依存性こそ私たちの生の基本的な条件である」³⁹。「人間の生は脆弱であり……無視されていない、排斥されていない、見棄てられていないという基本的な受容の経験は、人びとの「間」にあるという感覚や自尊の感情を回復させ、社会が否定するかもしれ

³⁶ 井上・船津（辻）2007 p160

³⁷ 詳しくは[下田 2010]を参照。

³⁸ 同様に辻大介は、「ケータイメールはすでに顔見知りの相手とのかかわりを補完し、強めていくメディアであり、インターネットは「電子的公共圏としての役割」よりも、「他者との私的な関わり合いを媒介するメディアに近いのが現状」であるとしている[井上・船津（辻）2007 p159, 161-162]。

³⁹ 斎藤 2008 p196

ない生の存続を可能にすることもある」⁴⁰。

冒頭でもふれたように、社会情勢が明るいものではない時代、働くことによって自己実現ができる人間は限られていると言える。「この仕事をしている自分」という確固たるアイデンティティを保持していることで満足を得ている者は少ない。フォーディズムでは単純作業の繰り返しであったが、ポスト・フォーディズムではその仕事すら、明日あるか分からない。このような状況に対して、宮台真司は、仕事での自己実現が不可能でも、他で楽しみ、幸せを見出す「非自己実現的幸い」を見出すことは可能であると説く⁴¹が、その手段として、親密圏に自己の居場所を見出し、そこでの交流を満足の糧にする方法を示すことが出来ると考える。「この人たちと親しい自分」「この仲間にいる自分」という風に、親密圏への所属をアイデンティティとすることが可能であろう。前述のように親密圏が自尊心を回復するならば、そこからまた、社会への再起も可能であると思われる。

■「共感の政治」へ

討議の可能性に対抗するために、この親密圏の議論を、デモクラシーの次元にまで上げたいと思う。ここで取り上げるのは、ディヴィッド・ヒュームやアダム・スミスの提唱した「共感の政治」という概念である。山脇直司は、コミュニケーションの在り方として、討議によるコミュニケーションと同時に、共感によるコミュニケーションの重要性を指摘している⁴²。この概念に於いて、まずヒュームは、人為的規範は「共感」によって支えられるとし、それを継承したスミスは、利己的個人が他者と衝突しないために、「公平な観察者」の共感が必要であるとした⁴³。

「共感」は、他者の立場、言説を理解し、共通利害を探ることに基づき、それにより正義原理を確立するが、それは親密圏の存在により精神的に支えを受けている者の方が、他者への配慮を得意とするだろう。現実社会に於いてある種の被排除的感覚を覚えた経験がある者が親密圏の構成員であればならなおさらそうであろうし、そうでなくとも、前出のバウマンが述べたようなポストモダンの個人化社会に於いては、それ以前は理解、認識されなかった様々な特殊事情を持つ者を当たり前目の当たりにする世の中となり、そういった者を含む全人類（誰一人として特殊でない者はいない）が各自の親密圏で、自己の境遇や交流態様をアイデンティティとすることにより、立場・事情に複数性が存在することを実感としてよく理解しつつ、かつ自己に自信を持って政治に取り組むことが出来るであろう。

■五の結び

以上の議論から分かるように、インターネットは決して無益なツールではなかった。「時間外交流」を通じて現実世界における親密圏の補強に貢献し、それが「共感の政治」に繋が

⁴⁰ Ibid. p206

⁴¹ 宮台・神保 2006 p195-198

⁴² 山脇 2008 p134

⁴³ Ibid. p67-68、また他に概説として、[片桐 2007 p128-129][佐々木・鷺見・杉田 2007 p121-123]などを参照。

ることで、政治学的に期待の持てるツールと言えるのである。最後に、近年多くのユーザを獲得している Twitter について⁴⁴、mixi と比較しながら、上述の期待という観点から、両者の長所と短所を論じて、五を結ぶこととする。

mixi 上では、既に述べたとおり、マイミク同士による、相互のコメントやレスポンスの交換がなされており、関係はフィックスされていると同時に、リプライは別途表示される。他方 Twitter では、機能として「返信」「リツイート」などがあるが、それらと一般のツイート、BOT による情報などは全て、タイムライン上に時間軸で差別なく表示される。この二つを比べると、自身へのリプライ、レスポンスを特別視する mixi の方が、つながりが深いメディアであると言える。

しかしながら反対に、mixi にも親密圏の観点から欠点がある。フェースブックや mixi に共通する問題として、SNS は基本的に親密圏、圏域を一つしか保有できない⁴⁵。一般の人間関係に於いて、人々が所属する交流圏域は複数、重層的であるにも拘らず、全てを友人という括りで一つの空間に同居させることは、多様な交流の可能性を阻害する（他の目が気になり会話が出来ない）。この点を補うものとして Twitter が使用されるケースが、近年は見られる。即ち、Twitter を「第 2 の親密圏」として使用するというのである。mixi ボイスと Twitter の両者に対して、使用態度を変えず使用する者を多く散見する。mixi の完全会員制、マイミクというフィックスされた関係と、Twitter の世界に解放された関係との違いの効果を認識できずに、両方を同じものとして使い始めているのだが、その原因の一つとしては、今述べたようなニーズが働いているものと考えられる。

両者の使用それぞれにメリットがあるが、最後に、Twitter 上でのタイムラインの人間関係がポストモダン的である点を指摘しておきたい。フォローやフォロー解除に承認が必要ないこと、友人からのコメントと他の雑多な情報とが同格とされることは、まさに現代が望む「気軽な・拘束されない」関係である。ポストモダン的社会に於いて「気軽な・拘束されない」関係はニーズとマッチして重宝されるが、それは当該社会が問題とする「個の連帯の崩壊」というストリームに乗ったものにすぎなく、それ自体がその問題を解決する道具・方法ではない。勿論 Twitter の情報収集に関する有用性は十分に理解しているが、このことを自覚せずに利用することは、これまでの議論の流れのなかに於いては、警鐘を鳴らすに値すると考える。

六、結論

○求められるメディアリテラシー

これまでの議論をまとめて言うならば、「ネット上で完結する関係は脆弱である」。本旨と逸れるので詳しくは言わないが、「インフォコモンズ」や web3.0 などの考案は、ウ

⁴⁴ Twitter の機能や利用方法については[津田 2010]が詳しい。

⁴⁵ 佐々木 2008 p99-101

ェブをもっとリアルに近づけようという試みである⁴⁶。しかし、「リアルをリアルにしよう」とする動きはあまり目立たず、なんでもインターネット上で解決しようとする言説が大勢を占めている。本論は、そういった、ある種人間関係の原点と言える「現実世界」でのつながりを忘れがちである今日の一部の論壇及びジャーナリズムの潮流の中で、現実世界を重視したいと考える論者に、一定の方向性を与えることが出来ていると思う。

現実世界とりわけ親密圏を重視することは、苛酷なポストモダン競争社会の中で、負けそうになりながらも、また仮に負けたとしても、親密圏上の交流により自尊心を回復し「英気を養う」ことで明日へ再起する可能性を秘めている。また、自身が精神的に救われているということで、他者への配慮がよりなされることにより、「共感の政治」も達成が期待できる。このような方面にインターネットを使用できることこそ、現代社会で称賛されるべきメディアリテラシーではないだろうか、と強く信じる。

七、おわりに

我々は画面と交流しているのではなく、その向こうの人間と交流をしている、という点に於いて、インターネットもインターネット空間も、あくまでツールでしかない。そのことを見過ごすとき、我々は、インターネット空間を、現実とは別個のものとして切り離して考えてしまう。しかしそれは、やや保守的な見解を示せば、原点としての「生身の」人間同士の交流という観点を見失っている、地に足のついていない見解と言わざるを得ない。実際、インターネットの使用で問題となることは、当人のコンピュータスキルではなく、それをしたことによる現実への影響を考慮出来なかった点であることが多い。本論は、インターネット空間を重視する論者に、現実を見つめる視座を持つことを促す目的を持つ。

また、気軽な関係を追いかける兆候は、丁度水が低い方に流れるのと同じであろう。本来的に人間関係とは、付き合いにくい人との交流も避けられなく、それも含めて交流であるのに、それを避けて気軽な関係に集中することは、結果的に人間が他者を配慮する能力（共感の能力も含む）を欠落させることに繋がるであろう。本論は、そういうストリームへの警告も兼ねている。

一つ付け加えるとすれば、本論は、やや特殊日本的であるという点である。ウェブ日記は日本のウェブ文化の特徴であり、個人解説のサイトでウェブ日記を掲載している割合は、日本では24%と、アメリカの8%、中国の4%に比べて圧倒的に高いという報告がある⁴⁷。よって、普遍的な議論たりえないかもしれないが、反対に、本論の期待は、日本人の我々ならば、より実感として理解できるのではなかろうか。

なお、今後の課題としては、本論の前提として議論の対象から外した、完全に孤立した個人について、理論的に救済の道を探ることである。

⁴⁶ Ibid.

⁴⁷ 石井ほか 2000

本論は当初、インターネットを批判することに終始する構成をとっていた。しかし他方現実を見れば、いくら批判したところでインターネットの発達はもはや止まらない。今後もますます様々な機能が出てくるであろう。そういった中に於いて、一步踏み込んで生産的な提言をすることで、なにか社会に貢献できるのではないか、と思ったのが、方針転換のきっかけである。よって、本論がインターネット及び社会の発展に何らかの形で資することを願って、終わりとしたい。

以上

<文献紹介>※アルファベット順

- バウマン, ジークムント著、森田典正訳『リキッド・モダニティ』(大月書店、2009年第6刷[2001年第1刷])
- ベック, ウルリッヒ著、木前利秋・中村健吾監訳『グローバル化の社会学 : グローバリズムの誤謬—グローバル化への応答』(国文社、2005年)
- フリードマン, トマス著、伏見威蕃訳『フラット化する世界 : 経済の大転換と人間の未来[増補改訂版]』上下 (日本経済新聞社、2006年)
- ハーバーマス, ユルゲン著、細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換』(未来社、2008年第2版第15刷[1994年第2版第1刷、1973年初版第1刷])
- 井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』(有斐閣アルマ、2007年初版第3刷[2005年第1刷]、第9章 辻大介「電子メディア上のかかわり」)
- 石田雅樹『公共性への冒険 ハンナ・アーレントと《祝祭》の政治学』(勁草書房、2009年第1刷)
- 石井健一ほか「内容分析による個人ホームページの国際比較」(『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』14号、2000年)
- 片桐稔晴『古典をひもとく社会思想史』(中央大学出版部、2007年初版第1刷)
- 河田潤一編『現代政治学入門』(ミネルヴァ書房、2009年初版第12刷[1992年初版第1刷]、第3章 武重雅文「新人類の政治学—政治意識と政治スタイル」)
- 宮台信司・神保哲生・東浩紀・水越伸・西垣通・池田信夫『ネット社会の未来像』(春秋社、2006年)
- 岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門』(有斐閣選書、2008年第6刷[2002年第1刷]、第3章 富田英典「都市空間とケータイ」)
- サイモン, ハーバート著、二村敏子・桑田耕太郎・高尾義明・西脇暢子・高柳美香訳『経営行動 : 経営組織における意思決定過程の研究』(ダイヤモンド社、2009年)
- 斎藤純一『政治と複数性 民主的な複数性に向けて』(岩波書店、2008年第1刷)
- 佐々木毅・鷲見誠一・杉田敦共著『西洋政治思想史』(北樹出版、2007年初版第7刷[1995年初版第1刷])
- 佐々木俊尚『インフォコモンズ』(講談社、2008年第1刷)
- 篠原雅武『公共空間の政治理論』(人文書院、2007年)
- 下田博次『子供のケータイ—危険な解放区』(集英社新書、2010年第1刷)
- 高原基彰『不安型ナショナリズムの時代』(洋泉社、2006年初版)
- 竹内啓編『意味と情報』(東京大学出版会、1988年、所収、広井脩「噂の社会学」)
- 津田大介『Twitter 社会論 新たなリアルタイム・ウェブの潮流』(洋泉社、2010年第6刷[2009年初版])
- 山脇直司『公共哲学とは何か』(ちくま新書、2008年第5刷[2004年第1冊])
- 吉田純『インターネット空間の社会学—情報ネットワーク社会と公共圏』(世界思想社、2000

年第 1 刷)

吉見俊哉『メディア文化論』(有斐閣アルマ、2009年初版第 8 刷[2004 年第 1 刷])

法学部法学科 02A08099 常盤成紀 (ときわまさのり)